

年の生存期間とされており (Leibovich ら J Urol. 2005), サイトカイン療法の導入後もあまり, 変わりがない. しかし, 本邦では欧米の報告に比べ, 転移してからの予後は, それほど悪くない印象がある. 新潟大学とその関連施設で行っているサイトカイン療法を行なった転移性腎細胞癌患者の平均生存期間は約 440 日あった. そこでインターフェロン α による adjuvant immunotherapy が主体の当院での転移性腎細胞癌症例の癌特異的生存について, 検討を行なった.

【対象と方法】1990 年から 2005 年の 16 年間に腎摘を行なった腎細胞癌症例 521 例のうち, 腎摘時からの転移症例 53 例, 観察期間中に転移が生じた症例 86 例であった.

【結果】初診時転移症例の生存率は 1 年; 58 %, 2 年; 38 %, 再発症例では 1 年; 71 %, 2 年; 57.5 %, であった.

【考察・結論】我々の検討では欧米の報告に比し, 良好な生命予後の結果が得られた.

7 前立腺癌生検病理診断の ISUP のコンセンサスに基づく Gleason score の再評価と臨床的リスクに及ぼす影響

若生 康一*・**・川崎 隆*
原 昇**・梅津 哉*・西山 勉**
内藤 眞*・高橋 公太**
新潟大学大学院医歯学総合研究科
細胞機能講座分子細胞病理学分野*
同 腎泌尿器病態学分野**

【目的】Gleason score の新しい診断基準である ISUP (The 2005 International Society of Urological Pathology) Gleason grading system とこれまでの診断基準 (Original Gleason grading system) を比較し, ISUP Gleason grading system が患者の治療選択に及ぼす影響を調べる.

【方法】2004 年及び 2005 年の 2 年間に新潟大学医学部付属病院で 168 名の患者に対し経直腸的前立腺針生検が行われそのうち 89 例が前立腺癌と診断された. これら 89 例の Gleason score の診断を次の 3 グループに分け行なった. Diagnosis A;

Original Gleason grading system に基づく General pathologists による診断, Diagnosis B; Original Gleason grading system に基づく Single pathologist による診断, Diagnosis C; ISUP Gleason grading system に基づく Single pathologist による診断. また, Diagnosis A, B, C を Kattan の nomogram に当てはめた場合の根治的前立腺全摘除術, 体外照射療法, 小線源療法における 5 年 PSA 非再発率を比較した.

【結果】Gleason score, primary Gleason pattern のいずれにおいても Diagnosis C において Diagnosis A 及び Diagnosis B に比較し grade が上昇した. Diagnosis A 及び Diagnosis B の Gleason grade の間に有意な差はなかった. また Kattan の nomogram に当てはめた場合, 根治的前立腺全摘除術, 体外照射療法, 小線源療法の全てにおいて Diagnosis C による 5 年 PSA 非再発率が Diagnosis A 及び Diagnosis B の場合に比較し有意に低下した.

【結語】ISUP Gleason grading system は watchful waiting も含め患者の治療選択に大きな影響を与えるものと考えられた.

8 子宮頸部腫瘍における Human Papillomavirus (HPV) 検査の意義

児玉 省二・小島 由美・笹川 基
本間 滋
県立がんセンター新潟病院産婦人科

【目的】子宮頸部の細胞診に HPV 試験を併用し, 診断的意義を明らかにすること.

【方法】子宮頸部のがん検診希望者, 二次検診紹介者, 異形成で定期的な観察者を対象とした. HPV・DNA 検査は, ハイブリッドキャプチャー法 (中-高リスク型 13 種類) で検索した.

【成績】HPV 検査陽性は 1351 例中 27.9 % で, その内訳はがん検診希望者 812 例中 5.5 %, 二次検診紹介者 297 例中 73.7 %, 異形成観察者 242 例中 46.5 % であった. HPV 陰性 974 例のうち, 異形成 33 例, 上皮内癌 6 例, 浸潤癌 7 例 (腺癌 5 例, スリガラス細胞癌 1 例, 扁平上皮癌 1 例) で

あった。診断精度は、HPV検査の感度85.4%、特異度89.7%、陽性反応適中度71.6%で、細胞診はそれぞれ88.8%、90.7%、74.3%であった。ただし、HPV検査は施行全例に対し、細胞診検査はスクリーニングされた症例が含まれている。

【結論】子宮頸部腫瘍のHPV検査は、頸管粘液の多い腺癌や特殊組織型の場合に限界を示した。

9 センチネルリンパ節生検を施行した悪性黒色腫症例の検討

竹之内辰也・高橋 明仁

県立がんセンター新潟病院皮膚科

当院では2002年から悪性黒色腫に対して色素とラジオアイソトープの併用によるセンチネルリンパ節(SLN)生検を導入しており、その転移の有無によってリンパ節郭清の適応を決定している。2006年までの5年間にSLN生検を施行した悪性黒色腫47例の発生部位は、頭頸部4例、体幹8例、手5例、足19例、四肢(手足以外)11例であった。47例中SLNに転移を認めたのは14例(30%)で、T分類別にみるとTis~T2は0%、T3は33%、T4は61%であり、原発巣の厚さ(tumor thickness)によって転移率が増していた。

SLN転移陽性にて根治的リンパ節郭清を施行した14例の内、残りの所属リンパ節に転移を認めたのは3例(21%)のみであった。SLN生検の今後の課題としては、T分類に基づく層別化によるSLN生検の適応決定や、SLN転移陽性の際の郭清適応症例の選別などが挙げられる。

10 肺癌に対するNovalisを使用した体幹部定位放射線治療の初期治療成績

松本 康男・杉田 公・横山 晶*
 塚田 裕子*・前田 恒治*・長澤 芳哉*
 小池 輝明**・大和 靖**
 吉谷 克雄**・保坂 靖子**
 県立がんセンター新潟病院放射線科
 同 内科*
 同 呼吸器外科**

定位放射線治療専用機Novalisによる肺病変に対する体幹部定位放射線治療症例は本年5月末で約200例となった。今回は2007年2月末までに根治的、あるいは準根治的定位放射線治療を施行(開始)した136例、144病変の解析を行った。当院ではcoplanarの1アーク治療を主体に行い、線量は48Gy/4回を基本的として行っているが、危険臓器に近接する病変の場合には60Gy/8frを採用している。肺門部病変に対しては55Gy/10回を行ったが、2例に再発を認めたため、現在では肺門部病変に対しても60Gy/8回で行っている。奏効率は80%(115/144)で、144病変のうち7病変(4.9%)で局所再発を認めた。1年生存率95.7%で、有害事象については1例にgrade5の肺毒性を認めたが、殆どの症例はgrade0~2であり、許容される治療方法と考えている。

11 ノバリス時代の転移性脳腫瘍治療選択

高橋 英明・吉田 誠一・松本 康男*
 杉田 公*

県立がんセンター新潟病院脳神経外科
 同 放射線科*

ガンマーナイフによる定位放射線手術(SRS)は転移性脳腫瘍の治療戦略を大きく変えた。また、ノバリスによる定位放射線治療(SRT)が加わって今また治療選択が変化しつつある。この2年間に当科において診断された転移性脳腫瘍症例がどのような治療選択が行われたかを調査した。

症例は203例で、その原発巣は肺87例、乳腺53例、大腸18例、上部消化管15例、泌尿器系8例、造血器8例、頭頸部その他9例、原発不明5